銘刀鍛冶　孝子美談　五郎正宗

全四巻（上映巻数）
三五場（劇中のシーン数）

《マークと場割》

第一　郷士の娘鍛冶に恋す　八幡社額堂
第二　行光お秋を娶る　行光仕事場
第三　銘刀を鍛えんと誓う　八幡宮社前
第四　舅の情けに京へ出立　藤沢宿外れ
第五　行光御番鍛冶と成る　九條殿館
第六　美しき侍女の介抱　同　長廊下
第七　後日の証拠に筐の短刀　三條橋詰
第八　産婦が臨終の遺言　五太夫住家

此の間拾ヶ年経過

第九　孫の行末を頼む　小田原街道
第十　桶屋の腕白小僧　行光住居内外　二場
第十一　行光五郎を弟子とす　桶屋見世
第十二　五郎親子の名乗り　行光住居
第十三　お秋嫉妬の怨言　お秋居間
第十四　生傷の絶間無し　同　台所
第十五　またまた継母の折檻　同　病間
第十六　孝子雪中に水行す　井戸端と台所　二場
第十七　お秋いよいよ五郎を憎む　元の病間
第十八　孝子身を投げんとす　由井が浜辺
第十九　往来中で兄弟喧嘩　雪の下町端れ
第二十　舅嫁の悪心に怒る　国光住居
第二十一　五郎母に急を告げる　途中と住居　二場
第二十二　孝子の一心継母の悔悟　八幡宮石段
第二十三　楠正成の使者　行光住居

再び五ヶ年経過

第二十四　五郎銘刀を鍛え上げる　井戸端と仕事場　二場
第二十五　五郎楠家へ伺候する　楠正成館
第二十六　三尺の秋水銘名も何のその　仝館庭前
第二十七　庭前に怪しき女性　九條殿館
第二十八　銘刀の威徳怪鳥を退治す　空中と山中　二場

登場名

一、五郎正宗
一、森川右馬之丞
一、堂守の老婆
一、行光弟子定吉
一、同　三太
一、関白九條殿
一、関白姫君
一、楓の父五太夫
一、行光一子新太郎
一、桶屋甚兵衛
一、新藤吾国光
一、楠正成
一、家臣江見野良三
一、侍女大勢
一、仕丁大勢
一、藤六左近太夫行光
一、神職半太夫
一、娘お秋　後に　行光の妻
一、同　留造
一、女中お作
一、柳原式部太夫
一、侍女　楓
一、母　渚
一、怪女　実は　怪鳥
一、医者竹庵
一、同女房おりつ
一、嫡男　正行
一、牛飼舎人四人
一、侍臣大勢
一、町人大勢

時は後醍醐天皇の元弘、建武、延元、年間の出来事

第一　郷士の娘刀鍛冶に恋す（八幡社額堂）

相州鎌倉八幡宮額堂の体［てい］（頼朝造営以前の古社）。ここに床几二脚程並べ、堂守の老婆、神職室越半太夫と語りおる。おりから扇ヶ谷の郷士森川右馬之丞は娘お秋を伴い、出で来り休む。老婆、茶を出す。

半太夫　これはこれは右馬之丞殿、ご息女ご同道にてお詣りでござるかな。

右馬之丞　オオ、ご神職半太夫殿でござったか。その後は無沙汰を致してござる。

半太夫　それはお互いでござる。それについても、いつもながら、お秋殿のお美しさ、さぞかし諸方からご縁談もござろうな。

右馬之丞　いやいや何と申すもご覧の通り不束者、いまだ良縁もござらぬがお心当りもござらば、ぜひお世話が願いたい。

お秋　アレ、もし父上様、往来中でそのような事を……。

右馬之丞　いや、ハハハ……。よいわサ、どうで一度は持たねばならぬ良人［おっと］じゃわ、のう半太夫殿。

半太夫　さようでござるとも、手前もせいぜい心掛け、良い婿君をお世話致すでござろう。イヤ、思わはぬ長話を致した。お帰りには手前方にて、ご休息下され。

右馬之丞　かたじけのう存ずる。

これにて半太夫は一礼して退場。その時、雪の下の住人刀鍛冶藤六行光、朴鞘[ほおさや]の短刀を包みし風呂敷包を持ち出で来り。

行光　それにおいでなさるは森川様でござりましたな。

右馬之丞　オオ、行光殿か、これへこれへ。シテ、お手前もご参詣かな。

行光　はい、実は兼ねてお誂えの短刀が鍛え上りましたゆえ、ただいまお宅様へ持参致しましたところ、当方へご参詣とうけたまわり、お跡を追うて参りましてござりまする。

右馬之丞　それはそれは、ご苦労でござった。デハ、早速拝見致そうかな。ウム、適[あっぱ]れ業物、イヤ、かたじけない、かたじけない。何と娘、見事なものであろうがな。

お秋　ホンにまあ、立派な好いお刀でござりますなァ。そんなら、あなた様が……。

お秋、恥かしきコナシ。

右馬之丞　そしていつも私が噂をする藤六行光殿というて、雪の下の刀鍛冶じゃ。ご挨拶をせい。

行光　行光殿、これが手前の娘でござる。

行光　これはこれは、初めてお目に掛りまする。毎度ごヒイキに預かりまして、ありがとう存じまする。

お秋　私が秋と申す不束者、何分宜しゅうお願い申します。

右馬之丞　時に行光殿、いろいろお礼も致したいが、手前の宅までお越し下されぬか。

行光　はい、ありがたくは存じまするが、今日は、ちと急ぎの仕事を掴[かか]えておりますれば、明日にもまた改めてお伺いを致しまする。

右馬之丞　さようなら、しからば明日はぜひお出で下され。

お秋　きっとお待ち申しております。

行光　ハイ、必ずお伺い致しまする。デハ失礼ながら、これでお別れ申しまする。

と、行光、立去る。お秋、恋慕の体にて見送る。

右馬之丞　茶代はこれへ置くぞよ。デハ娘そろそろ参らうかな。これ娘、これサ娘…、お秋ッ。

と、肩を打つ。お秋、恥かしきコナシにて顔を隠す。

右馬之丞　ハテ、何を見ておるのじゃ、ハッハッ……。

第二　行光お秋を娶る（行光仕事場）

雪の下の刀鍛冶行光住居仕事場の体。行光は弟子の定吉を向う槌に廻し刀を鍛[う]っている。その時、神職半太夫、急ぎ来り。

半太夫　オオ、行光殿、内[うち]にか。イヤ、めでたいぞ、めでたいぞ。

行光　これはどなたかと思いましたら半太夫様。めでたいとはお祭りでも出来ますかな。

半太夫　イヤモウ、祭りどころの騒ぎではない。モットめでたい、あなたの身の上。日本一の果報者じゃ。好い花嫁が出来たぞよ。

行光　ハーア、花嫁とは、そりゃどなたでござるな。

半太夫　これ行光殿、落ち着いておるどころじゃない。相手は名に負う扇ヶ谷で一万石の田地

持ち。その一人娘があなたを見かけてスッカリ惚れ込み、それからコッチはブラブラ病。恋わずらいまでさせるとは罪じゃぞよ、罪じゃぞよ。

行光 何を下らぬ事を、今日は仕事が忙しい。冗談なら、おいて下され。

半太夫 その身の出世というものじゃ。よもや不承知はあるまいがな。

行光 いいや不承知じゃ。そんな縁談ならどうぞ断って下され。

半太夫 エエ、この良縁を断れとは。

行光 身不肖なれども藤六行光、禁庭様のお枕刀をも鍛える大事な望みある者、他の家へ養子に行く身じゃござらぬ。トットここを帰らっしゃい。これ定吉、半太夫殿を門口まで送り出せ。

定吉 ハイ。コウコウ[これこれ]、神主さん、お帰なさい。

この時、右馬之丞、お秋を連れ来る。

右馬之丞 アイヤ、いずれも方、お待ち下され。

行光 オオ、あなたは森川様。

右馬之丞 貴殿を養子にと思いしは、拙者一生の誤りでござる。定めしお気に召すまいが改めてお秋をお送り申すでござろう。お受け取り下され。

行光 ありがとう存じますが、この儀は平[ひら]にお断り申す。

お秋 もうこの上は。（自殺せんとす）

行光 ああこれ、早まった事を。（その手を留める）

半太夫 ムム、幸いこの金槌で頭を砕いて死んで見せるわ。

定吉 コウコウ、飛んでもない。そんな真似をしちァいけねえ。

お秋 どうぞ放して、殺して下さりませ。

行光 いやいや、滅多にここは放しませぬぞ。

お秋 ソンナラ、私の願いをば。

行光 それじゃというて、その儀ばかりは。

一同 サァサァサァ。

右馬之丞 ぜひとも得心下されよ。

定吉 親方こいつァ、一番考えものだぜ。

行光 ウム、見る影もない行光をば、それ程までの思し召し。いかにも女房にお貰い申そう。

お秋 エエ、スリャ、おかなえなされて下さりまするか。

右馬之丞 何んにもいわぬ、かたじけない。

第三　銘刀を鍛えんと誓う（八幡宮社前）

ここへ行光、お秋(女房のこしらえ)、一子新太郎(当歳)、乳母に抱かせ参詣の態[てい]にて、出で来る。

行光 お秋や、坊は大層おとなしいようだの。

お秋 はい、好い心持ちでスヤスヤと寝ておりまするわいナァ。

行光 オオそうか、何にもせよ、お参りをするとしよう。

と、三人、社前へ参り合掌なし。

行光　南無八幡大菩薩、一生に一度、行光が御番鍛冶になれますよう、ご利益お授け下さりませ。

お秋　また二つには、我子新太郎が身の行末、お守り下さいませ。南無八幡様、南無八幡様。

と、両人礼拝なし行かんとする。この時、社の陰［かげ］より右馬之丞、出で来たり。

右馬之丞　オオ、婿殿。お秋、今日は孫めが宮詣りじゃのー。

行光　これはこれは舅殿、あなた様もご参詣でござりましたか。

お秋　父さん、よいところでお目にかかりましたなァ。

右馬之丞　ドレドレ、孫めをちょっと見せて下され。オオ、わずか見ぬ間に可愛うなりおった。時に行光殿、今これにて承りおれば、一生一度の御番鍛冶になりたいとの願い。ついてはこの度、京都関白九條殿のお触れ出しで、日本国中の刀鍛冶に申つけ、恐れ多くも一天万乗の大君のお守刀を打たすとの事、何とそなた、都へ上る心はないか。

行光　はい、お詞［ことば］までもござりませぬ、ぜひ納めたいとは存じますれど、何を申すも多勢の刀鍛冶、ことに京都へ上りますには、それぞれの手続き、莫大の費用、私如き未熟者には及ばぬ事かとあきらめておりまする。

右馬之丞　その気遣いは無用に致せ。手続き万端、費用のところはこの右馬之丞が肝入り致すぞ。

行光　エエ、スリャ、あなたが何かの事を？

右馬之丞　ササ、その代りには天晴れ名刀、見事仕上げて見せて下され。

行光　及ばずながらも一心込めて鍛え上げるでござりましょう。

右馬之丞　オオ、それ承って安堵致した、何かの事は帰宅の上、ゆるゆる相談致すと致さう。

行光　ありがとう存じまする。

右馬之丞　オオ、孫よ泣くな泣くな。父の出世を待つのが好いぞ。

第四　舅の情に京へ出立（藤沢宿外れ）

ここへ行光、弟子二人に刀を入れたる小さき唐櫃（注連［しめ］を張り、御用の机を附す）、後より右馬之丞、お秋、赤児を抱き、定吉、送り来る。

行光　舅殿にはお見送りの程、恐れ入ってござりまする。斯［か］く京都へ上れまするも、皆あなた様のご厚恩、決して忘れは致しませぬ。

右馬之丞　何の何の、その礼には及ばぬ事。一日も早く御番鍛冶になってくれるが、私の望みでござる。では急いで参るがよいぞ。

行光　さようなれば、これにてお別れ致しまする。

お秋　もし、行光殿、随分途中気を附けて、めでたいお帰りを待ちまする。

行光　オオ、お秋、そなたも留守中を大切に坊の面倒を頼むぞよ。

定吉　それじゃ、親方、しっかりやっておくんなされませ。

行光　オオ、貴様も留守を頼んだぞ。さようなれば舅御様。

右馬之丞　オオ、首尾よう帰国を待ちおるぞ。

第五　行光御番鍛冶と成る（九條殿館）

京都九條殿、上段に関白、三宝に乗せられたる刀箱を前に一刀を検分なしおる平舞台に、柳原式部太夫、下手に藤六行光、平伏なし、その他、侍臣大勢並びおる。関白は一刀を鞘に押し頂いて。

関白　ウム、天晴れなる業物なり。こりゃ、相州雪の下の住人行光とやら、面[おもて]を上げよ。

行光　ハハァ……。

と、行光、恐る恐る面を上げる。

関白　この度、諸国の刀剣を持参なしたる剣のうち、その方が鍛えし一刀、恐らく並ぶ者なし。従ってこれなる御剣[ぎょけん]を恐れ多くも大君のお守り刀に奉り、今日改めてその方を左近太夫に仕官なし、当年御番鍛冶を申し付くるぞ。

式部太夫　ハハァ……。

と、墨附を受取り。

式部太夫　こりゃ藤六、勿体なくも関白殿下の御朱印ありがたくお受け致せよ。近う。

行光　ハハァ。身にあまりたる御錠[じじょう]、ありがたくお受け致すでござりまする。

関白　この上は式部太夫、彼に酒肴を取らせ、今宵は一泊許し遣わせ。行光、大儀であったのう。

と、これにて関白、先に侍臣附添い、奥殿へ入る。

式部太夫　こりゃ藤六、上々の御前の首尾、さぞ満足であろうのう。

行光　ハハッ。これもひとえにあなた様のお引き廻し、厚くお礼を申し上げまする。

式部太夫　こりゃ、誰ぞある、お申し附けたる酒肴、持参致せよ。

婆　ハハァ……。

と、次の間より侍女大勢、三宝に乗せたる土器及び肴等持ち出で、行光の前に並べ、ズット後より侍女楓、長柄の銚子を持て立ち出る。

楓　ハァ…、さようなれば失礼ながら。

と、楓、立寄り酌をなさんとして、行光と顔を見合せ、両人はっと恥しきこなし。楓はなみなみと酌をなす。行光、気を替え、盃を頂き。

行光　ありがとう、頂戴致すでござりましょう。

式部太夫　オオ、今宵は夜をともに過すが宜[よ]いぞ。

第六　美しき侍女の介抱（同館　長廊下）

ここに行光、酒に酔い蹌踉[そうろう]として来り。

行光　心嬉しく過したせいか、コリャ大分酩酊致した。風に吹かれて醒すとしようか。オオ、コリャ、一時に酔いを発して、アッ痛ッ、ムウ。

と、行光、癪[しゃく]が起りし体にて廊下に倒れる。この時、侍女楓、雪洞[ぼんぼり]を持ち来り。

楓　オオ、あなた様は最前のお方様、大層お苦しみの様子、お気をたしかにお持ちなさりませ。モシ、どうぞなされましたかナァ。

と、介抱する。行光、心づき。

行光　オオ、最前のお女中か……。呑めぬ御酒を嬉しさのあまり一杯二杯と過せしせいか、にわかに起る持病の癪。アッ痛ッ、ウム。

楓　それはまあ、さぞお困りでござりませう。オオ、幸い持参の薬、これなと召し上がって、しばらくお気をお鎮めなされませ。

と、楓は急ぎ薬を出し、水を飲ませ、背をさすり、介抱する。これにて行光の癪おさまり。

行光　かたじけないご介抱、お陰様にて激しい、さし込みもおさまりましてござりまする。お礼は言葉にて尽されませぬ。

楓　もったいない、そのお言葉、それで私の念も届き、……イエ、何をいうも、ここはお廊下、身体が冷えましてはなりませぬ。少しも早う、お寝間にて、ご休息なされませ。

行光　何から何までご親切にありがとう存じます。何分宜しくお願い致しまする。

楓　さようなれば妾[わたし]がご案内致しましょう。

と、立ち上り、行かんとして、ヨロヨロとなる。

楓　アア、モシ、お危ぶのう（と手を取る思い入れ）ござりまするぞえ。

第七　後日の証拠に筐の短刀（三條橋詰）

ここへ一疋の黒牛、綱を放れて狂い来り、走り去る。牛飼四人、追いかけ来り。

舎人　アッアッ、牛は向こうへ逃げたぞ。必ず、ともに怪我すまい。

と、四人ワヤワヤいいながら、牛を追いかけ来る。この時、行光出で来る後より、楓、被衣[かつぎ]を冠[かぶ]り、追うて来り。その袂を掴まえ。

楓　アアモシ、しばらくお待ち下さりませ。

行光　シテ、お手前は何人でござりまするな。

楓　ハイ、妾でござりまする。

と、被衣を脱ぐ。行光びっくり。

行光　アア、昨夜計らず館にて。

楓　ハイ、厚いお情け受けました、その嬉しさの忘れかね、お跡を慕うて参りました。ご帰国遊ばすなら、どうぞ妾も、ともどもお連れなされて下さりませ。

行光　これはしたり。そういわるるは、ごもっともなれども、お身は大事なご奉公、また私とても御番鍛冶に仕官受けて、一度は国元へ帰らにゃならぬ身の上、また来春は改めて当地へ上って来る程に、それまで待っていて下され。

楓　イエイエ、そのような事、おっしゃってお見捨てなさるお心か、お恨めしゅうござりまする。

行光　ハテ、聞き分けない。何でそのような事があるのか。そなたの疑い晴らすため、私が手づから鍛えの、この短刀、また逢うまでの筐[かたみ]として、そなたに渡して置きますぞよ。

楓　そんならこれを（と短刀を受け取り）そういう事なら諦らめてお便りを待ちまする程に必ず見捨てて下さんすな。

行光　人目につかわば、互の身の上、早[はや]去らば。

と、行かんとするを縋り留め。

楓　アアモシ、せめてお訣[わか]れにお所とお名をお聞かせ下さりませ。

行光　オオ、私が住居は東国にて。

と、云い掛けると後から(牛が放れた危ないぞ危ないぞ)と叫びながら町人大勢逃げ来る。これに驚き行光は、楓を傍らの柳の木陰へ忍ばすところへ、以前の暴れ狂い出て来るを、行光、牛の前に大手を拡げて立ち塞がる。牛は猛然と行光を角にかけんとする。行光は左右に身をかわし、牛と争い、トド両角に諸手をかけ、グット押え止る。この時、以前の牛飼舎人四人、走り出で来る。それと見て。

舎人　アレアレ、嬉しや、よう牛を留めて下された。皆の者、お礼をいえ、お礼をいえ。

と、四人、厚く礼を述べる。楓、柳の陰より出んとするを、行光眺めて。

行光　アアコレ、危い。必ずここへ出るまいぞよ、出るまいぞよ。

この時、牛角再び暴れんとするをシッカと押え。

行光　ハテ、後日の便りを（と牛を捻じ伏せ）待たっしゃれ。

舎人は牛を押える。楓、木陰に泣き伏す。

第八　産婦が臨終の遺言（五太夫住居）

京都嵐山の麓、木樵五太夫住居、娘の楓は産後の病褥に寝ている。父親五太夫は薬を煎じおる。母親渚は産子[うぶご]の五郎を抱き、寝かし付けている。やがて五太夫、薬茶碗を持ち、枕辺に寄る。屏風を取り退け。

五太夫　オオ、娘よ、どうやら目が覚めておるような。薬でも呑んではどうじゃな。

楓　ハイ……お戴き申しまする。

五太夫　オオ、そうか、そんなら私が起してやりましょう。

と、抱き起し薬を呑ます。楓はもったいなさそうに咳き入る。

五太夫　コレ娘、急がずにゆっくり呑むがよいぞよ。

楓　はい、ありがとうございまする。そうして坊はいずれにおりまする。

渚　孫めは私のふところにスヤスヤ眠っている様子、必ず心配せぬがよいぞや。

楓　父さん母さん、永らくのご介抱ご苦労かけて済みませぬ。

五太夫　ハテ、何をいうぞい。親子の中に遠慮はいらぬ。一日も早うようなって親に安心させてくれよ。

楓　もったいないそのお詞、なおりたいは山々なれども、何をいうにもこの重病。それにつけてもお二人様へ、今までお包み申しましたが、何をかくそう、その子の親は東国辺の刀鍛冶、いつぞやご殿のご給仕に思い染めたが身の因果。皆この身のいたずらから……。ご奉公もなりかね、お年寄られたお二人様に我が子のお世話、この身の介抱、空恐ろしの不幸の罪、お許しなされて下さりませ。

五太夫　オオ娘、よう打ち明けていうてくれた。してそのお方のお名前は。

楓　サア、ふとした事からお名前も聞く隙さえも泣く泣くに、また逢うまでの印ぞと、筐に残るこの短刀。

と、床の下より以前の短刀を出し。

楓　そのままにおわかれしましたが、五郎が成人の、のちのちはこの一品、証拠として行衛をたずねて下さりませ。

五太夫　オオ、気遣いしやんな、こういう確かな証拠があれば、たとえ名前は知れずとも、きっと尋ねて名乗りをさしょう。必ず心配せまいぞよ。

楓　ウ嬉しゅうございます。そのお詞を聞く上は思い残りはございませぬ。

渚　アアコレ娘、そのような悲しい事、必ずいうてたもんなや。五郎の事は安心して早う達者になって下されや。

楓　母さん、どうぞ五郎を一度、妾に抱かせて下さりませ。

渚　乳を含ませてやるのがよいぞよ。

楓　オオ五郎よ、たとえ母はないとても、父御の行衛を尋ね出し、立派にその名を挙げてたも。母は草葉の陰から、そなたの身をば守りますぞ。

と、楓はウットリとなる。

五太夫　これ娘、どうしやった。これ娘、娘。

渚　気をたしかに持ってたも。娘、楓ヤーイ。

楓、遂に絶命す。

この間、十ヶ年経過の事

第九　孫の行末を頼む（小田原街道）

小田原の松原。五太夫は順礼姿にて腹痛に悩む。同じく順礼姿の五郎（当時十歳）に、手を引かれて杖を突き出で来り。

五郎　お祖父さま、まだ痛みはなおらぬかえ。

五太夫　イヤイヤそなたのお陰で大分楽になったようじゃ。ここで暫らく休んで行くとしよう。

五郎　それじゃ俺がさすって上げようよ。

と、五太夫、松の根に腰を掛ける。五郎その背をなでる。

五太夫　モウよいモウよい。そなたもここで一休みするがよいぞ。

五郎　アイアイ。

と、五郎、五太夫の傍へ腰を掛け。

五郎　そうしておじいさま。お父さまのお家はまだ遠いのかえ。

五太夫　エッ……イヤ、親人の家は東国で刀鍛冶と聞いたゆえ、やがて知れる事があろうとはいうものの、毎日毎日、尋ね探せど今もって知れぬというのは、よくよく尽きた親子の縁……イヤモウ雲をあてじゃわえ。

五郎　そんならお父さまに逢われませぬか……。

と、泣き伏す。

五太夫　アア、コレコレ、泣く事はない、心配するな。このじいが一念でも逢わさで置くものか。それにつけては廻り合うに大事な証拠はこの短刀。

と、腰に附けたる風呂敷包みの短刀を出し。

五太夫　今からそなたにやる。しっかり持っていようぞ。

五郎　そんならこの刀を持っていたら、お父さんに逢われるのかえ。

五太夫　オオ、逢えるとも逢えるとも、死んだそなたのお母ァや婆さまの思いでも、きっと逢える時があろう。サァ、ここへ来い。

と、短刀を五郎の背へ結び附け。

五太夫　サア、ソロソロと出掛けよう。

五太夫、急に差し込み、苦しみ倒れる。五郎びっくり。

五郎　モシ、おじいさま、気を確かに持って下され。モシおじい様いのう……。

五太夫、悶絶する。五郎、縋り付き、泣き叫ぶ。この時、桶屋甚兵衛、旅行姿にて通り掛り、この体「てい」を見て。

甚兵衛　オイオイ、どうした。ヤッ、病人のようだな。

五郎　おじいさまが死んでしまいます。モシ、おじさん、助けて下さりませ。

甚兵衛　そいつあ大変だ。よし、おれが押えているから、早く水を汲んで来ねえ、早く。

五郎　アイアイ。

と、五郎は順礼の柄杓を持ち、小川より水汲み来る。

甚兵衛　コレ、旅の父さん、コリャ、道了様の御符だぞ。サア、しっかりしなせ、しっかりしなせ。

と、水と御符を呑ませ、介抱する。五太夫、漸く心付く。

五太夫　オオ、孫よ。オオッ、いずれのお方様かは存じませぬが、お手厚いご介抱、アありがとう存じまする　とても助からぬ私の命、この孫めが行末をご慈悲でござりまする。ござりまする。d

と、手を合す。

甚兵衛　心配しなさんな、おれは鎌倉雪の下、桶屋の甚兵衛という者だ。道了様へお参りしての帰りがけ、お前を介抱するというのも何かの縁だ。引き受けたから安心しなせえよ。

五太夫　アア……五郎……よ、タ……達者で……居て、ク呉れよ。

甚兵衛　コレコレ、つまらねえ事をいっていちゃいけねえ、しっかりしなせえ。

と、甚兵衛、五太夫の手を取り肩へかける。五太夫、ウットリとなる。

五郎　お祖父さま……（と縋りつき泣き入る）。

甚兵衛　オオ、可愛そうな……事だなァ。

第十　桶屋の腕白小僧（行光住居仕事場）

ここに兄弟子の定吉、鞴[ふいご]の前に横座に座し、弟子の留造、三太、両人向う鎚に廻り、刀を鍛[う]ちおる。桶屋の小僧五郎市、手桶、古釣瓶等をかつぎ。

五郎　桶屋――タガの仕かえ、桶屋――。

と、呼びながら出て来る。そっと窓の内を窺[のぞ]き、自分の持って来た釣瓶を台にして覗く。仕事場に三人は刀を鍛ちおる。五郎は窓より首を出し。

五郎　ヤア、相変らず屁っぴり腰をやってるな、困ったもんだなァ。

定吉　オヤ、桶屋の小僧奴、また来やがったナ。

留造　うぬ、生意気な事を吐[ぬか]すと承知ァしねえぞッ。

五郎　だって屁っぴり腰だから、屁っぴり腰っていうんだ。ここの内[うち]の叔父さんは上手だ。お前達は下手だなァ。そんな事で碌[ろく]な仕事は出来ないよ。

三太　オヤ、こん畜生、ふざけた事を吐かすと叩くぞ。

五郎　お前達が来る内にゃ、俺[おい]らの方にも足があるから、とっとの昔に逃げてしまうさ。

留造　野郎、モウ、勘弁が出来ねえぞ。

と、留造、持ちたる鎚を投げ出すと、五郎、驚きて窓より離れ傍[かた]えの松の木に昇り、身を隠す。留造、出で来り、四辺[あたり]を見廻わし。

留造　いまいましい畜生だナァ。

と、つぶやきつぶやき退場。五郎、松の木より飛び降り、舌を出し再び窓の下へ忍び寄る。仕事場へ留造、立腹の体[てい]にて入り来る。定吉、見て。

定吉　どうした留、捉まったか。

留造　兄貴駄目だ、あんな素ばしこい餓鬼はありゃしねえ。とうとう逃げてしまった。

定吉　さうだろう、あんな小僧に構わねえで早くこの仕事を上げてしまわねえと、また親方から大小言だぞ。モウ一息だ、しっかりやれ、しっかりやれ。

と、三人、またもや仕事にかかる。この時、五郎再び顔を出し。

五郎　ヤァ、また屁っぴり腰が始まったナ。

留造　オヤ、この野郎。

と、窓の内から五郎の手をしっかり押え。

留造　モウ今度は逃さねえぞ。オイ三太、表へ廻れ。ぶん捉まえろ。

三太　合点だ。

と、急ぎ退場。元の窓にて五郎は腕首を押えられ、苦しまぎれに留造の腕へかみ付く。

留造　アッ痛ッ。

と、叫び、手を放す。この隙に五郎は一散に逃げる。そこへ三太、出で来り、五郎を追い掛ける。留造も続いて出で来て追ひ掛け、遂に五郎を両人にて捉まえ引きずり来る。

五郎　ごめんよ、ごめんよ。モウいわないから堪忍しておくれよ。

両人　ナニ、今更勘弁が出来るものか。

と、両人にて打ち据える。そこへ定吉、出で来り。

定吉　コラコラ、二人、モウ好い加減で勘弁してやれ。

三太　コンナ餓鬼は後日のコラシメだ。

と、五郎、詫び入るを両人にて打ち据えんとする時、窓の内より行光、顔を出し。

行光　コレコレ、騒々しい。そんな小僧を捉えて手荒な真似をしてはならねえぞ。

定吉　オー親方だ親方だ。

と、両人を鎮め。

定吉　親方、聞いておくんなさい。実はここにいる小僧が毎日毎日窓の外へ来て、こいつらの仕事を見ちゃ、屁っぴり腰、屁っぴり腰と悪口をいやあがるもんですから、二人が怒って折檻をしているところなんで。

五郎　お前だってあんまり巧かあねえや。

定吉　オヤ、あんな事をいやあがる。

行光　まあ待ちねえ、待ちねえ。そりゃ小僧が豪[えら]い。小僧のいうのがもっともだよ。

定吉　ジョ冗談じゃございませんぜ、親方までそんな事、おっしゃるんじゃ困りますよ。

行光　それでも、我が目からそう見えるから……。小僧、貴様、人の事を悪口いう位では、

ちっとはこの鎚が打てるか。

五郎　そうですねえ、ここにいる屁っぴり腰の人位にゃ打てない事もありますまいよ。

留造　何を吐かしゃがる。畜生まだあんな事を。

三太　まあ怒るな怒るな。それじゃ小僧、ここへ這入れ。一つ打って見ろ。

行光　エッ、それじゃ打たして下さいますか。嬉しいナァ、嬉しいナァ。

五郎　その代り打ち損なうと承知はしないぞ。サァ、這入れ這入れ。

定吉

と、定吉、留造、三太、五郎を引き立て元の仕事場へ這入る。行光、上手に座しおる。三人、五郎を伴い来る。

行光　定吉、貴様、その小僧を向こうへ廻して一つ打たして見ろ。

定吉　承知しやした。コレ小僧、支度をしてしっかりやれよ。

五郎　大丈夫です。それじゃ定さん、巧くやんねえよ。

定吉　あんな生意気な事を吐しやァがる。

これより向こう鎚に廻り、定吉とともに刀を打つ。行光始め三人、その巧みなるに驚き呆れる。

行光　小僧もういい、もういい、なるほど人の悪口をいう程あって身体の構え、槌の入れ方、実に見上げたものだ。そうして今までどこの鍛冶屋に奉公していたのだ？

五郎　私は桶屋の小僧ですから、どこの鍛冶屋にも参りません。鎚を打つのは初めてでございます。

行光　何？　今日が初めてだ。コレ定吉始め二人の者、何と感心な者ではないか。

定吉　イヤモウ、この小僧どうして鎚の持ち方を覚えていたのじゃ。

五郎　ハイ、私は刀鍛冶になるのが望みで毎日毎日お宅の店で皆様の仕事を見て覚えたのでございまする。モシ叔父さん、どうぞ私を親方の弟子にして下さいませ。

行光　ウム、好きこそ物の上手なれ。そりゃ次第によっては弟子にしてやるまいものでもないが、一応貴様の主人にも相談した上で何とかして遣[つか]わそう。

五郎　そんなら内の親方が承知したらお弟子にして下さいますか。それじゃ叔父さん直ぐに桶屋へ行って掛け合って下さいまし。

行光　ハテ、忙しい奴だ。それでは兎に角、行くとしようか。

第十一　行光五郎を弟子とす（桶屋見世）

ここに甚兵衛、仕事をなしおるところへ、行光入り来り。

行光　ハイご免よ。

甚兵衛　これはこれは親方でござりましたか、サァどうぞこちらへ。そうして何ぞご注文でも。

行光　イヤ、注文ではないが、お前さんところに五郎という小僧がいる筈。

甚兵衛　ヘイ、おりますですが、何ぞご用で。

行光　実はその小僧の事について少しばかり聞いてもらいたい事がある。

甚兵衛　エーッ、親方どうか勘弁なすって下さいまし。あいつ位、しようのねえ奴はござりませんので、叩き出そうにも小田原から拾って来たので帰すところはなし、困り切って

いるんでございます。どんな悪さをしゃあがったか存じませんが、どうか充分にお懲らしなすって。

行光　オイオイ、甚兵衛さん、お前は何か感違いをしているね。実は小僧が私のところへ来ていうにゃ、刀鍛冶になって見たいから、ぜひ弟子にしてくれというのさ。お前さんの方で不用の小僧なら、どうと手放して私の方へくれげる訳には行くまいかな。

甚兵衛　そいつァありがとうございます。私の方じゃ願ってもない幸いなんで、どうか今からでもお連れなすって下さいまし。

行光　そりゃ早速の承知で、何よりありがたい。しかし今、小田原から拾って来たといいなすったようだな。

甚兵衛　サァ、それについて哀れな話がございますんで。実は去年の春、私が小田原の道了様へ参詣しての帰り途、六十ばかりの順礼の爺さんが、あの小僧を連れて松の根方でウンウンと苦しんでいるじゃございませんか。あまり可愛そうになりやしたから、御符を呑ませまして介抱しましたところ、やっと気は附いたが、碌に口は聞けねえんで、何でも生まれは京だそうで、どうかこの孫の行末を頼むと泪ながらに手を合わして、往生をしてしまいやした。餓鬼は内へ引き取って小僧に使っているんでございますが、イヤモウ手こずっているんでございます。

行光　アアソウか、それはまあ好い功徳をしてやんなすった。それについちゃ、ほんの少しだがあの小僧の養育料、どうかお前さんの方へ納めて置いて下さい。

甚兵衛　イエイエ、何とおっしゃっても、こりゃ頂けません。

と、両人、押問答。五郎、木陰より出で。

五郎　桶屋の親方、遠慮しないで貰ってお置きよ。

甚兵衛　エッ、野郎そこにいやあがったか。

五郎　鍛冶屋の親方、ありがとうございます。

行光　おお、五郎、今日から貴様は私の弟子じゃ。サァ、甚兵衛さん、ぜひともこれは納めて下さい。

と、行光、無理に金を渡す。五郎、喜び、礼をいう。

第十二　五郎親子の名乗り（行光住居）

ここに行光、新太郎（十三歳）対話。お秋は新太郎を連れて父右馬之丞のところへ行って来るという。行光は舅に宜しくという。お秋、新太郎、退場。

行光　アア、何だか今日は肩が凝ってならぬ。オイ誰かいないか。

五郎　ハイハイ。

と、五郎、下手より来り。

五郎　親方、何ぞご用でございますか。

行光　オオ、五郎か気の毒だが二ツ三ツ肩を叩いてくれ。

五郎　ハイ畏[かしこま]りました。

と、五郎、後に廻り行光の肩を叩く。

行光　なァ、五郎、月日の立つのは早いものだ。お前も桶屋の内から貰って来て、モウかれこれ一年だ。いつかは聞かうと思っていたが、お前の生まれは京ださうだが、そうして両親は達者でいるのかな。

これを聞き、五郎、泪にくれ。

五郎　ハイ、その両親の顔は知らず、私の小さい時、母さんは死んでしまい、父さんは今もって行衛が知れないのでござりまする。

行光　何、お袋は死んで親父の行衛が知れないと。モウ肩は宜いから、その訳を話してくれ。コレ泣いていては仔細が解らぬサァ。どうじゃ、どうじゃ。

五郎　ハイ、そんならお話申します。親方聞いて下さいまし。

（これより浪花節）

生まれは京都の嵐山で、お母さんの顔は知らず、お祖父さんの手一つで寺子屋へやって貰い、その行き帰りの途中では、友輩[ともがら]の子供達に、親のない子じゃ父[てて]なし子と、いじめられるが何より悲しく、何をかくそう母というは、去る上方のお屋敷へお女中奉公に上っていて、ふとした事から東国辺の刀鍛冶といい交わし、ただの一夜で因果の胤、名をも聞かず別れしが、後日の筐[かたみ]と貰った短刀、これを印に尋ね合い、親子の名乗りをさしてくれというかいわぬに息が絶え、それからお祖父さんと二人でお父さんに会いたいと、その短刀を証拠にして廻国したのでござりまする。

行光　（詞）ムム、聞けば聞く程、哀れな身の上、さうしてその短刀とやらは。

五郎　（詞）ハイ、大事に持っておりまする。

行光　（詞）ムム、そんなら早く見せてくれ。

五郎　（詞）ハイ、ご覧なすって下さりませ。

と、懐中より短刀を出す。行光、見て驚き。

行光　（詞）オオ、これぞ正しく、ムム、さては一夜の情けにて、子まで諸[もう]けて相果てしか。ムム、コリャコリャ、五郎、もしやそなたの母の名は楓とはいわなんだか。

五郎　（詞）エッ、どうしてそれを。

行光　（浪花節）知らいでなろうか、そちが尋ねる父というのは何を隠そう、この行光。

五郎　エエエエ……。

行光　（詞）ササ、その驚きはもっともながら、この短刀は私が鍛えたもの、かかる証拠を持つ上は正しく我が子に違いはない。

五郎　（詞）エエッ、そんなら日頃尋ねる父さんか。

行光　（詞）伜であったか。

五郎　（詞）お父さん。

と、縋り寄る

行光　（詞）オオッ。

と、引き寄せる。

五郎　（詞）懐かしゅう……ござります。

行光　（詞）親はなくとも子は育つ…。よくぞ成長致したな。

（浪花節、終／三味線伴奏終了）

と、両人相擁して泪に暮れる。廊下にお秋、新太郎を連れ立ち聞く。

第十三　お秋嫉妬の怨言（同お秋居間）

ここにお秋は火鉢を抱え、煙管を杖に思案の体。傍えに新太郎、春駒を持ち遊びおる。

お秋　新坊や、我が身いい子じゃ程にお父さんをここへ呼んでたもや。

新太郎　アイアイ。

と、お秋、立腹のこなし。新太郎は急ぎ立去る。

お秋　アア、じれったい、妾しゃ、業[ごう]がにえて…どうしてくれよう。

と、お秋、煩悶立腹の体、行光来り。

行光　オオ、お秋お前、いつの間に帰って来たえ。

お秋　ヘン、いつ帰って来ようと妾の内[うち]です。それとも皈[かえ]って来たのが悪うござんすかえ。

行光　何だかお前、大層怒っているようだね。

お秋　これがどうして黙っていらりょうぞえ、ねえ、お前さん。今では左近之太夫という仕官を受けて立派な御番鍛冶になったのは誰のお陰じゃと思うてかや。

行光　つまらぬ事をいうじゃないか。それは皆、森川右馬之丞殿のご厚恩と私は一日だって忘れた事はありませぬよ。

お秋　ヘン、うまい事ばかり。それ忘れない者が、かくし子を拵らえ、イイエサ、あの五郎は一体誰の子でござんすぞえ。

行光　エッ、それじゃ今の様子をば。

お秋　知るまいと思っても、そううまくは行きません。ちょうど今から十三年前、京都へ上る時、お前さんは何とおいいでした。今度は恐れ多くも大内[だいり]のお守り刀を打つんだからと、精進潔斎、身を清めて行ったのは何のためでござんす。それをまああらう事かあるまい事か、大それた京の女と、エエ、モウ、妾しゃ、腹が立つ、腹が立つ。

と、武者振り付く。

行光　コレコレ、お秋、腹の立つのはもっともじゃが、これにはだんだん深い様子が。

お秋　イエイエ、そのいい訳を聞く耳持たぬ。大方その女をどこぞへ、かくまってあるんでござんしょう。エエ、口惜しい口惜しい、妾しゃ、もうどうしたらこの胸が。

と、叫び、行光の胸倉を取り、こづき廻し、泣き叫ぶ。

行光　コレコレ、お秋、聞いたとあらば腹も立とうが、私のいう事、心を鎮めて聞いてくれ。

と、その手を放し。

行光　今まで隠したのは皆私の過ちだ。あのおり京へ上った時、若気の至り、二つには呑まぬ酒を呑んだが過ち。五郎を我が子と知ったのも今日の今、何で女を隠して置こうぞ。その母親は産後のなやみに五郎を置いて皈[かえ]らぬ旅、今は便りも身内もない者、私の罪は重々詫びる。コレお秋、堪忍してくれ、堪忍してくれ。

お秋　そんならアノ五郎には母親もほかの身内もないというのでござんすかえ。

行光　木から落ちた猿同様、八幡様を誓いに立て、何で私が偽りをいおうぞ。どうぞ疑い晴らした上、今日から新太郎同様に五郎を真の我が子と思い、どうか育ててやってくれ。その代り新太郎には相州流の湯加減譲り、我が家の家督、相続させよう。聞き分けてくれ、お秋、この通りじゃ、この通りじゃ。

と、行光、身を悔い、手を下げて詫る。これにてお秋、やや心の解けたるこなし。

お秋　その詞[ことば]にきっと間違いはありませぬかえ。

行光　何で違えてよいものか。

と、この時、定吉、留造、三太、五郎を連れ来り。

定吉　親方ッ。

というに、行光、はばかり、涙をかくす。

三人　おめでとうございまする。

第十四　生傷の絶間無し（行光宅台所）

ここに女中お作、揚板[あげいた]を上げ、縁の下より炭を出し〝炭取り〟へ入れおる。奥よりお秋、出で来り。

お秋　お作や、炭を出したらお前は茶の間を片附けてくりゃれ。

お作　はい畏[かしこ]りましてござります。

と、お作〝炭取り〟を持ち退場。

お秋　それにしても五郎はどうしているのであろうな。あんなに憎らしい餓鬼ちゃァ、ありゃしないよ。

と、四辺[あたり]見廻し、それと頷き、縁の下の蓋をわざと明け置き、五郎、外より荷ない桶にて水を汲み担ぎ入り来る。

お秋　五郎ッ、お前、今まで何をしていたんだよ。

五郎　ハイ。お母様が水を汲めとおっしゃいましたから、ただ今、汲んで参りました。

お秋　またしても口答えをしくさる。それっぱっかしの水を汲むのに、いつまでかかっているんだえ。ちょっと用がある程に、ここへお出で、早くここへお出でというに。

これにて五郎、倒れ、水をこぼす。

お秋　オヤオヤ、お前、水をこぼしたね。ああ分った。

と、五郎ジリジリ立去るを、後から激しく突く。これにて五郎、板を踏みはずし、縁の下へ片足落し、痛さにわっと泣き入る。

お秋　エエ、またメソメソと始めたね。いつまでも泣いているがいいや。意気地なし奴、ザマ見やァがれ。

と、お秋、悪々[にくにく]しく空うそぶいて奥へ入る。五郎、起き上らんとして、痛さに上られぬ。この時、定吉、出で来り、それと見て驚き抱き上げる。五郎の向うずねより血汐、流れおる。

第十五　またまた継母の折檻（お秋病間）

ここにお秋、寝床の上にくくり枕に凭[もたれかか]り病人の体[てい]。女中のお作、肩を揉み、傍えに新太郎おり、医者竹庵、薬を調合なし終りし体。

竹庵　ご新造様、これが煎じ薬でござるが、早速召し上ったらお熱も取れるでござろう。

お秋　それはありがとうござんす。新太郎や、このお薬を台所へ持って行って、五郎に急いで煎じて来るようにいいつけてたもいの。

お作　イエ、お薬なら私が煎じて参りましょう。

お秋　イエ、お前ではいけないんだよ。新坊早く持ってお出でというに。

新太郎　アイアイ。

と、新太郎、薬包を持ち、下手へ退場。

お秋　それから先生、妾この頃ちっとも眠れなくて困るんですが、お宝はいくら掛っても構いませぬ程に、夜眠られるような良いお薬はござんせぬかえ。

竹庵　そりゃない事もござりませぬが、睡り薬と申すと、お上からご法度の秘蔵で容易に差上げるお薬ではござらぬが、外ならぬこちら様の事ゆえ、極内々で調合致すがその代り一腹以上召し上ると大変な毒になりますからな、その辺はよくよくご注意をなさらんとな。

お秋　エッ、それじゃ毒に……。まあさようでござんすか。そういうお薬ならたびたびと申してもご面倒でござんしょうから、五六服一辺にご調合をお頼み申しまする。

竹庵　承知致した。では明日にでも早速お届け申さう。愚老はこれでお暇仕る。

と、これにてお秋はお作に命じ、お作、薬札を持ち、竹庵を送り両人退場。入れ違いに五郎、茶碗を盆に載せビッコを引き引き出で来り。

五郎　お母様、お薬を煎じて参りました。

お秋　オオ、五郎かい、ご苦労だったねえ。気の毒だがここへ持って来ておくれ。オヤオヤ、お前、妙な足つきをして何を愚図愚図しているんだえ。薬が醒めてしまうじゃないか。

五郎、傍らへ寄り。

五郎　ではお母様、お薬をお召しなさりませ。

お秋　アア、ありがとうよ。

と、薬茶碗を取る振りをしてわざと叩き落す。

五郎　アッ、飛んだ粗匆[そそう]を致しました。

と、畳を拭うを、お秋、きっと睨み附け。

お秋　何だえ、粗匆だって空々しい事をおいいでないよ。お前は大方なんだろう。妾とはなさぬ仲ゆえ、邪魔してならぬゆえ、一日でも早く死ぬがしと、薬を呑ませまいとわざと落したに違いない。

五郎　イエイエ、何でそのような事がござりましょう。ご免なされて下さりましょう。

お秋　ご免なさいは聞きあいた。サァ、ここへお出で、エエ、強情な子だね。お出でったら来ないかえ。

と、床より這い出し、襟髪を取って引き付け。

お秋　お前のような強情な奴は、こうしてやるから覚えてお置きよ。

と、五郎の詫び入るのも構はず、煙管で散々にぶち据え。

お秋　エエモウ、顔見るのも病気にさわる、早くあっちへ（と突き放ち）行きくされ。

と、憎々しきいい分、五郎わっと泣き入る。

第十六　孝子雪中に水行す（井戸端と台所）

《註》原典中の「竹本　……」の記載は、登場人物の語りではなく、義太夫節による場面説明を意図したものと思われる。

竹本　……　冷後の雲は次第に降り積り、身内も凍る真夜中過ぎ、五郎はそっと忍び足、四辺[あたり]伺い独り言。

と、勝手口を明け、五郎は忍び出で、四辺伺い独り言。

五郎　（詞）ああ寒いなァ（で雪）こうして毎晩お母様の病気を直さうと、八幡様へ願[がん]を掛け、今日で七日の満願に少しの利目[ききめ]もないというのは、神様もこの世にはないものか、情ない事じゃなあ。

竹本　……　母を思い身をかこち、神を怨むぞ哀れなる、五郎はきっと心を定め。

五郎　（詞）いやいや、それだ今晩一晩あるものを、もったいなや神様をお怨み申すは恐ろしい。

少しも早くお願い申さう。そうじゃそうじゃ。

竹本　……そうじゃそうじゃと健気にも寒さを厭わず、脱ぎ捨てる衣類も何の身一つに、震える足を踏みしめ踏みしめ、素足に凍る井戸の側。

と、五郎は衣類を脱ぎ捨て、凍る双手を口に当て、震えながら井戸側へ寄り合掌なし。

五郎　（詞）もうし八幡様、どうかお母様のお心触け一日も早くご病気をお癒しなされて下さりませ。南無八幡様、南無八幡様。

竹本　……一心なったる孝子の願望、因果は巡る車井戸、汲み上げ汲み上げ打かぶる五郎は声を振り絞り。

五郎　（詞）南無八幡様、南無八幡様、願いを叶えて下さりませ。お願い申し上げまする。

竹本　……またも立ち寄り、くるくるくる水は肌を釘氷、今は堪えかね、よろよろよろ、倒れ伏したるありさまは無惨というも哀れなり。こなたはそれを白河の夢を破られ定吉が……。

と、定吉、布子の〝寝巻き〟を着て上手より、寝呆け顔にて出で来り。

定吉　（詞）アア（と欠伸）好い心持ちに寝ついたが、宵に一杯やったせいか、小用が近くなってなんねえ。ドレ一ぬきして来ようか。

竹本　……つぶやき、つぶやき立ち寄る戸口、明くればサット吹き込む雪。

と、定吉が雨戸を明けると外より雪吹き込む。定吉はばかり飛び退き。

定吉　（詞）おお寒い……。ヤッ、いつの間にか大層積りやァがったな。道理で身内が冷える筈だ。

竹本　……おりから聞ゆる水の音。

定吉　（詞）こいつは妙だ。真夜中に水の音、どうやら井戸の方角だが不思議な事もあるもんだな。

竹本　……不審ながらに透し見る。

ここに五郎、再び水を浴び倒れおる体。勝手口より定吉、首を出し伺いおる。

五郎　（詞）今日が七日の大事な満願、こうしてはおられぬところ、もうし八幡様、たとえこの身はどうならうとも、一命代えて母様のご病気癒して下さりませ。南無鎌倉八幡様、南無鎌倉八幡様。

竹本　……唱ふる声も、うらがれてよろぼいよろぼい、立ち上りまた取り縋る井戸の綱［つな］、それと見るより定吉は。

定吉　（詞）ヤッ、五郎さんだ。ト飛んでもねえ事をしちゃなんねえぜ。

と、抱き留める。

五郎　（詞）イエイエ、放して放して。

竹本　……留めるを突き放［の］け振り放し、孝子の一念汲み上る、水は氷か雪の中、ザンブと浴ぶれば、定吉もともに濡れ鷺、堂を伏し、震えながらも、しっか抱き据え。

定吉　（詞）コウコウ、五郎さん、滅多な真似をしちゃァならねえよ。

五郎　（詞）オオ、お前は定さん、留めずに放して下さりませ。

定吉　(詞)まあまあ待ちねえ、コウ五郎さんお前はまあ何という感心な子だらうな。今ここで聞いていたが、この寒中に水を浴び大事な命を捨ててまで、あの継母の病気をば怨みもせずに癒そうたあ、実に見上げた此方[こなた]の孝心、俺ァ聞いていてさえ悲しくって泪のとどめがありァしない。その孝行な一心で、アア鬼のような継母のいかな邪慳の角も折れ、病気が直るに違いねえから、もうそれで沢山だ。こんな真似して此方の身にもしもの事でもあったら、第一お父さんに不幸になるぜ。ナ、解ったかえ、これから俺の部屋へ行き温めて上げようから、内へ這入って寝るがいいよ。

五郎　(詞)あい、それじゃ定さん、今夜の事は父さんにも母さんにも、ほかの人にも内所[ないしょ]にして話をするのは止して下さりませ。

定吉　(詞)いいともいいとも、俺ァ決して誰にもいやしねえから安心をするがいいや。何にしてもこの態[ざま]じゃ、しようがない。オオ、幸い俺のこれを着るがいいや。

五郎　(詞)だってそれじゃ定さんが寒いだらう。

定吉　(詞)何の、お前さんに較べりゃ寒い事があるものかね。サアサア早く着るがいいぜ。

五郎　(詞)定さん、お前の親切は忘れませぬ。この通りお礼を申上げまする。

竹本　……冷える手先に伏拝む定吉堪らず抱き寄せ。

定吉　(詞)オオッ、五郎さん　勿体ねえ勿体ねえ、お前さんにこんな事をされちゃ俺らに罰があたりますよ。サァ負うて上げるから背中へ(竹本、了)。

～この間、台本二頁なし。

第十七　お秋いよいよ五郎を憎む（元の病間）

～写真にてよろしく頼みます。

定吉　エエ、いい方[ほう]だって、そいつァいけねえ。いっその事早く、くたばって……いや何早く癒らなくちゃいけやせんね。

お秋　オイオイ定吉、お前一体ここへ何しに来たのかえ。

定吉　ヘイ実は何です、少しばかりおかみさんのお耳へ入れて置きたい事がありますんでね。おかみさん、あなたの今度の病気はね、罰が当ったんでございますぜ。

お秋　何んだえね、罰だって……。お前何を寝ぼけているんだえ。

定吉　なるほど、これば かりじゃ、お解りになりますめえ。お話致しやすから、どうか聞いておくんなせえまし。可愛そうな五郎はあなたの病気を癒そうと八幡様へ願を掛け、昨晩もあの大雪の中で裏の井戸端へ出て水を浴び、自分の凍えるのも忘れて一心不乱に信心をしていなさるじゃございませんか。そんな孝行な息子さんがどこの国にありますえ。それも知らずに毎日毎日。

◎この間、台本抜けあり、写真にてよろしく。

五郎　お母さま何ぞご用でもございまするか。

お秋　オオ五郎か、そこじゃ話が出来ないからこっちへお這入りよ。

五郎　ハイ。

と、怖る怖る座敷へ這入り、隅の方へ手を支える。

お秋　まあもっとこっちへ寄っておくれよ。今定吉に聞けばお前は水まで浴びて信心をしておくれだそうだね。一体そりゃ誰のためにするんだえ。

五郎　エッそれじゃァ、あの定さんが。実は母様のご病気が一日も早く癒りますように。

お秋　お黙りよ、何だって私の病気が癒るようだって。ヘンお前の信心はそうじゃなかろう。継[まま]しい仲の私ゆえ、一日も早く死ぬが—と呪って水を浴びたんであろうがな。

五郎　いえいえ、何でそのような事がござりましょう。

お秋　いえいえ、そうじゃそうじゃ、呪い殺さうとしたに違いない。よくもよくも、子供だてらに大胆なそのような事をしくさって。ここへ来て殺しておくれ。早くここへお出というに。

五郎　アレお母さま、どうか勘忍して下さいませ。

お秋　堪忍も好く出来た。サァここへ来ないかえ。エエ剛情な畜生だね。

と、傍らの鉄瓶を投げる。鉄瓶の蓋、五郎の眉間へ当り、血汐流れる。五郎、アッと叫び転ぶ。定吉、跳り出で五郎を抱き起し。

定吉　オおッ五郎さん、タ大変な怪我を仕なすったナ。ヤイ鬼婆奴、罰当り奴、よくも俺を欺した上、五郎さんにまで乱暴な真似を仕やァがったな。

と、五郎、袖を引く。

定吉　いいよいいよ五郎さん、心配しなさんな、こんな悪婆にゃあ……。ヤイくたばり損ねえ、貴様の餓鬼の新太郎にゃ、お蚕くるみの栄耀栄華、いかに生さぬ仲たあいえ、この寒空に、五郎さんにゃ汚れ腐った袷一枚、それさえ、我慢をしているに疵まで付けるたあ何事だ。もう了簡ならねえぞ……。五郎さん、うっちゃって置きねえというに。

お秋　オイオイ定吉、油かすでもなめたと見えて、たいそう口が達者だね。私ゃお前の主人だよ、失礼な事をお言いでないよ。

定吉　何、主人だと、イイヤ、今日から立派に暇を貰った。暇さえ取りゃ五分と五分、これからは俺が相手だ、五郎さんのかわりに貴様の面を叩き破るからそう思え。

五郎　アレ定さん待っておくれ、皆私が悪いんだから、どうか我慢をして下されや。

定吉　もう堪忍袋がはち切れたんだ放してくんねえ、放してくんねえ。

と、定吉が立上り、お秋に打って掛らんとする。五郎その手に縋り、留めんとする。この時、女中のお作出来り、五郎と共に一生懸命にて定吉を無理に一間へ連れ去る。

お秋　ええいまいましい畜生だ、今にどうするか見やあがれ。

と、この時、上手より新太郎、薬包みを入れたる袋を持ち出で来り。

新太郎　お母さん、今お医者様からこの眠り薬が届いたよ。

お秋　オオご苦労だったね、サァサァこっちへお出で。お前は五郎と違い本当に孝行者、さあこのお菓子を御召[おあが]りよ。

新太郎　それからね、お医者様のいうにはこの薬は強い薬だから、たんと呑むと命に係るって、そういって皈[かえ]ったよ。

お秋　アアそうかい。

と、菓子を出して子供に与える。

第十八　孝子身を投げんとす（由井ヶ浜）

ここへ五郎は腹空「すか」してよろよろと泣く泣く出で来り、四辺「あたり」を見廻し小石をい袂に入れ、傍らの岩に立ち。

五郎　お父さん、どうか勘忍して下さいまし、南無阿弥陀仏。

と、まさにこうよと見えたる時、この前より行光の義弟新藤国光、同女房おりつ来り。この体を見て驚き、国光急ぎ五郎を抱き留む。

国光　五郎じゃないか。ト飛んでもない事をするじゃないか。

五郎　エエ、こなたは叔父さん、放して殺して下さりませ。

国光　馬鹿な事をいわないで、エエ待てというたら待ちねえ。コレおりつ、五郎をしっかり押えておれ。

と、岩上より砂地へ突きやる。おりつ、下にて抱き留める。国光も続いて飛び降りる。

おりつ　五郎や、お前はまあ、何だってこんな真似をお仕「し」なんだえ。

国光　大方深い訳があろうが、この叔父さんが目付「みつ」けた上は決して死ぬには及ばぬぞよ。

おりつ　おや、この子はまあ、たいそう痩せ細ってどうしたというんだえ。

国光　アッ、おりつ、五郎を見や。五郎の額に大変な疵があるぜ。

おりつ　まあどうしてこんな怪我をお仕なんだえ、泣いていては仕方がない。サァ訳をお話よ。

国光　訳を聞くにゃ及ばぬ。こいつァてっきり鬼婆の仕事に違いない。いかに生さぬ仲とはいえ、ひどい事をしゃあがったな。

五郎　アア叔父さん、この疵は棚から鍋が落ちたのでござりまする。

国光　いやいや、お前がいくら隠しても俺にゃちゃんと分っている。モウ今日という今日は了簡ならねえ。オイおりつ、俺は五郎を内「うち」へ連れて行かう。お前はこれから雪の下へ行って、兄貴をすぐに連れて来い。

おりつ　アア、ようござんす。それじゃ五郎を頼みましたよ。

と、行かんとする。

五郎　アア、叔母さん、待って下さいまし。

と、縋り付くを。

国光　アア、コレお前は俺と。

と、無理に引戻し。

国光　一緒に来るのじゃ。

第十九　往来中で兄妹喧嘩（雪の下町端れ）

おりつ　エエ、お前は兄さん、私ゃ口惜しい。すぐに内へ来ておくれよ。

行光　エエ、お前は妹、何だめそめそ泣きだして。アア解った。また相変らず夫婦喧嘩だな。

おりつ　何でもいいよ。内へさえ来りゃ解るんだから。サァ私と一緒に来ておくれよ。

と、おりつ、行光を引張り、両人争いながら退場。木陰より右馬之丞出で。

右馬之丞　今のはたしかに婿の行光、さては兄妹いさかい、コレャ仲裁を出ずばなるまい。

と、右馬之丞、両人の後を遂[お]う。

第二十　舅嫁の悪心に怒る（国光住居）

ここに火鉢を挟んで、国光、五郎、対話。

国光　五郎よく打ち明けて話してくれた。実にお前は感心な者だ。今お父さんを呼びにやった程に俺が充分いって聞かせてお前は内へ引取るから、マア安心するがいいぜ。

五郎　ありがとうございます。だが叔父さん、お母さまはどうか悪くいわないで下さいませ。

国光　エッ、コリャ五郎、さんざんいじめられた上、まだあんなことをいうのかや。まあ、いいから万事は叔父さんに任せて置け。オオヤット茶が沸いた。さぞ腹が空いただろう。サアこれを持って奥へ行き腹一杯食うが好いぞや。

五郎　それじゃ、叔父さん、ご馳走になります。

と、土瓶を持ち奥へ入る。

国光　それに付けても行光は何をしていやあがるんだろう。

と、待ち兼ねたる折柄、無理に行光を引立てて出で来り、内へ入れ。

おりつ　お前さん、やっと兄さんを連れて来たよ。

と、いえど、国光は苦り切っている。

行光　国光、その後は無沙汰をして済まぬ。また何か夫婦喧嘩でもしたようだが、知っての通りのおりつの我侭[わがまま]、どうか私に免じて許してやってくれ。

国光　喧[やかま]しいやい。誰が夫婦喧嘩をしたというのだえ。

行光　ホホ、たいそう機嫌が悪いが、いう事があるなら綺麗さっぱりというてくれたが好いじゃあないか。

国光　ヤイ行光、一体アノ五郎はどうする心算りなんだ。殺すなら一思いに何故殺してやらぬ。成程お前は森川右馬之丞と云う父[とつ]さんに恩になった義理もあろうが、かかあの尻に敷かれるのも大概にして置きなされ。

行光　コウコウ国光、藪から棒にそんな事をいわれては、私にはサッパリ訳が解らぬが。

国光　そう解らない？　だから腰抜けの意気地なしというのじゃ。マア、よく聞きなされよ。

可愛そうに五郎はあの鬼のような母親の病気を直したいという一心で雪の降る真夜中、水まで浴びて命をかけ、信心をしていたんだぞ。俺はなァ、それを聞いた時には可愛そうで可愛そうで涙が止まらなかった位だ。それにどうだ、あの鬼婆奴は五郎の額に鉄瓶を投げつけて大きな疵を拵[こし]らえたんだぞ。

行光　エエッ、それじゃ鍋が落ちたというたのは、あのお秋が…。

国光　まだまだ、そればかりじゃない。結局は毒を盛って五郎を殺そうという悪計み。五郎がそれを知った故、今日で四日というものは干乾しにされていたんだぞ。

行光　エエーッ。

国光　サァ、これだけいえば用はねえ。五郎と親子の縁を切れ。今日から俺が引取って立派に一人前にして見せようから。手前はこれから内へかえッて嬶[かかあ]大明神と祭って朝晩拝んでいやあがれ。

と、これにて行光はっと俯向き、深い思い入れ。

おりつ　もし、兄さん、お前あんなにいわれても、口惜しくはないのかえ。五郎が由井ヶ浜で身投げのところを私達二人が助けて来たんだよ。それも知らずにのめのめと、よくもそうしていられるね。夫婦喧嘩どころの騒ぎじゃないよ。ほんとに愛想もこそもつき果てたよ。

と、おりつ泣き伏す。

行光　エエ、国光、おりつ許してくれ。親身なればこそ、それ程までにいうてくれた。お秋が毒を盛って殺そうとまでした事は知らなかった。モウモウ我慢が出来ぬ。きっと、らちを付けるがそれまで五郎を預って置いて下され。この通り私が頼みだ。二人共許してくれ。

国光　よし、そういう事なら待ちもしようが、一体その始末はどうして、つけるのだ。

右馬之丞　アイヤ、その始末は某[それがし]がつけるでござろう。

と、右馬之丞、内へ入る。

国光　ヤツお前は森川、何で俺の家へ這入って来たのだ。

右馬之丞　サァ、そのご立腹はごもっとも。聞けば聞く程、恐ろしい娘が悪心。親子の縁を切った上、秋奴[め]を成敗致して申し訳仕[つかまつ]らん。何れも方、ご免下さい。

行光　モシ舅殿それはあんまり短気というもの。

と、引留める。

右馬之丞　エエ放せ、放してくれ。

と、行光、両人で右馬之丞と争う。国光は構わずにやれという思い入れ。この中、五郎奥より首を出し、この体[てい]に愕[おどろ]き、裏口の障子明け一目散に走り去る。右馬之丞は行光を突き退け走り行く。

第二十一　五郎母に急を告ぐ（途中と住居）

ここへ五郎一散に走り、後より右馬之丞、追取刀［おっとりがたな］にて出来り。同じく後より行光、国光、おりつの三人別々に走り出で、遠く森陰に隠れる。

行光の住居、お秋は病後の針仕事。五郎、襖を蹴飛ばし急ぎ来る。

五郎　モシお母さん大変です。今、お祖父さんがお怒りになって、あなたを斬るというて、お出でになります。早く逃げて下さりませ、早く早く早く早く。

お秋　またそんな嘘をいうて私を愕かそうとするんだね。なんて太い奴だらう。覚えていろ。

と、お秋、五郎を尺にて打ち据えるところへ、右馬之丞来り。

右馬之丞　己れ不孝者、親が手ずから成敗致す。

と、一刀、抜き放す。

五郎　アレ祖父さま、どうぞ待って下さりませ。

と、縋り付く。

右馬之丞　危い、退いてくれ。退けというに。

と、振り放し、お秋に斬りつける。お秋、一目散に逃げる。右馬之丞、後を追う。五郎、続く。行光、国光、おりつ、このさまを見て同じく後を追う。

第二十二　孝子の一心継母の悔悟（八幡宮石段）

お秋、髪振り乱し石段に上る。右馬之丞、お秋を斬らんと追う。そうはさせじと五郎止める。お秋、右馬之丞、五郎、しばし入り乱れて争う。遂にお秋、石につまずき転ぶ。右馬之丞、得たりと斬り付けんとする一髪、五郎、お秋の上に伏し、右馬之丞の一刀勢にあまり五郎の背に真一文字。五郎、アッと倒る。

右馬之丞　アア、それじゃ、五郎をば。

と、愕く。お秋、呆然たり。行光、国光、来り共に驚く。

行光　ヤヤッ、これゃ五郎が手疵を負うたか。

国光　エイッ、おりつ、早く医者を呼んで来い。早く早く早く。

おりつ　アイアイ。

と、おりつ去る。行光、国光、五郎の介抱をなす。

行光　コレ五郎、気をしっかり持て、父だよ。

国光　疵は浅い。しっかりしろ、しっかりしろ。

五郎　エエ、お父さま、叔父さま、そうしてお母様は？

行光　おお、お秋は無事だから安心しろ。

右馬之丞　コレ孫よ、許してくれ。そなたに深手を負したも皆この爺の粗忽、この上は身代投げ捨てても、快抱[かいほう]させねば置かぬよ。

五郎　アアモシ祖父さま、あなたに科[とが]はござりませぬ。私は元より覚悟の上、斬られたのでござりまする。

三人　ナナ何といやる。

と、これより篠入り。【伴奏に篠笛が加わるの意。】

五郎　お母さまのお身代りに死ぬと思った私は本望。只この上のお願いには、最後[いまわ]の際[きわ]にお母さまより、五郎可愛やとたった一言お聞かせ下さりませ。これがこの世の私のお願いでござります。

行光　エエ五郎、よくいうた。よくいうてくれた。お秋、今の五郎の詞[ことば]を聞いたか。邪見な親を怨みもせず一命捨てての優しい心。これでも五郎を憎いと思うか。イヤサ、これでも迷いが醒めぬかや。

お秋　……おおそうじゃ。

と、お秋、落ちたる一刀にて自害せんとする。行光留め。

行光　エエお秋、何故お前は自害するのじゃ。

お秋　何で死ぬとはお情けない。今の五郎の一言で、今日という今日、夢が醒め、何の生きていられましょう。五郎への詫[わび]は今、目の前で、どうぞ放して下さりませ。

行光　エエ狼狽[うろ]たえたか痴気者奴、今己れが死んだとて五郎の命が救[たす]かるか。この上、我に難儀をかけるのか。エエいいようのない。アア、ココナ不所存者奴が。

と、刀をもぎ取る。

お秋　それでは死ぬにも死なれませぬか。

と、ワッと泣き伏す。

国光　エエ、それでこそ誠の心。少しも早く、それ五郎を。

お秋　アイ。

と、お秋、五郎を抱き寄せ。

お秋　コレ五郎、今までの私の罪はどうぞ許してたもいのう。

五郎　オオ、お母さま。

五郎も縋り、お秋も抱き、苦しきうちにも嬉[よろ]こびに泣きくれる。この時、おりつ、医者を連れ、定吉、留造、お作、附添い来り。医者は急ぎ五郎の疵を見る。

第二十三　楠正成の使者（行光住居　内、広間）

五郎を中心に、右馬之丞、行光、国光、お秋、新太郎、おりつ、居並び。お作、留造、三太、酌を

なし、五郎が全快祝いの体[てい]。

右馬之丞 アレアレ酩酊致した。如何[いかん]と思いし五郎の手疵も全快致して祝の酒宴、身共が望みも相叶い、かように嬉しい事はないぞえ。

五郎 これと申すもお祖父さまや皆様方のご丹精、ありがとうござりまする。

お秋 それに就いても一つのお願い。今日から新太郎を別家させ、この五郎に当家の跡目を取らせて下さりませ。

国光 これというのも孝の徳。

おりつ おめでとうござりまする。

と、嬉しきこなし。この時、定吉、出で来り。

定吉 モシ親方、今玄関に西国の楠家の使者だというて、親方と五郎さんに是非お目にかかりたいと立派なお侍のようなお方がお出でござりまする。

行光 エッ、楠家のお使者だと。ご丁寧にお通し申せ。

定吉 承知しやした。

と、定吉退場。

右馬之丞 それでは私は暫く次へ退座致さう。皆も参るがよい。

と、右馬之丞、一同退場。五郎と行光残り、定吉の案内した楠家の臣、江見野良三、出で来り上座へ通り、定吉退場。

行光 コレハコレハ、ようこそお越し下されました。私が当家の主、藤六行光、またこれにおりますが一子五郎にござります。お見知り置かれ下さりましょう。

良三 ご叮嚀なご挨拶、拙者は楠正成の家臣、江見野良三と申する者。実はこのたび、ご主君には当家の子息五郎殿の孝心深きを聞し召され、御公達[ごきんだち]正行公がその孝道にあやかるようと、五郎殿に守り刀を打たせてくれよとの即ち使命、この儀、ご承知下されたし。

行光 この身にあまるご諚[じょう]。ありがとう存じまするが、まだ若年の伜、何卒今より五ヶ年のご猶予下だし置かれましょう。

良三 ムム、そりゃ五ヶ年相経れば見事鍛えてくれるのじゃな。

行光 お詞[ことば]までもござりませぬ。この命抛[な]げ出して御刀を仕上げさするでござりまする。

良三 早速の承引、さぞ君もご満足。きっと、詞を伝え申すぞ。

第二十四　五郎銘刀を鍛え上る（井戸端と仕事場）

この間、五ヶ年経過。

行光宅、勝手口、元の井戸端。ここにお秋、水を浴び、彼方に向い合掌し。

お秋 南無鎌倉八幡宮、何卒五郎に銘刀を鍛えさせ下さるよう、願望成就なさしめ給え。

南無八幡大菩薩、南無八幡大菩薩。

と一心不乱に祈願を凝らす。行光、鎌倉八幡宮を祭りおる。行光と五郎（当時十八才）紋沙[もんしゃ]の狩衣に武士烏帽子を冠り、一心に刀を鍛える。

行光　オオ、美事の上げ鎚、それ湯加減せよ。

五郎　ハハァ。

と、五郎、刀を風呂に入れる。湯気茫々[ぼうぼう]と立昇[のぼ]る。

五郎、引出し、行光に示す。行光じっと眦[なが]め。

行光　五郎でかした。適[あっぱ]れ名刀打ち上げ得たぞ。

画面朦朧と変る。

元の井戸端。お秋は水に凍え絶息している。行光、五郎の両人出来り、それと見て愕[おどろ]き、介抱なし。

行光　コレお秋、どうしておる。しっかりしろ、しっかりしろ。

五郎　母上様、五郎でござりまする。お心確かにお持ち下されませ。

お秋　エエ五郎、行光殿か。

行光　心附きしか。してまたそなたは何故にかかる水行致しておるのじゃ。

お秋　サァこれも皆過し年、五郎に受けた恩返し、適[あっぱ]れ名刀打たすため。

五郎　エエッ、そりゃ私のために母上様。ありがとうござりまする。

お秋　して御刀は出来ましたか。

行光　エエ、そなたの一念空しからず、世にも稀なる銘刀を五郎が鍛え上げたるぞよ。

五郎　これと申すも母上様が身にあまるご厚恩。

お秋　イエイエ、私の手柄じゃござんせぬ。皆八幡様の尊いご利益。思えば嬉しや、喜ばしやなァ。

お秋伏し拝む。五郎は母に礼を述ぶる。

第二十五　楠家へ五郎伺公す（楠正成館）

ここに正成一子正行（十才）扣[ひか]え、その他、家臣大勢居並ぶ。折から家臣、江見野良三は五郎の鍛えたる刀を三宝に乗せ来る。

良三　ハハァ、東国鎌倉ノ住人、行光が一子五郎、兼ねて申し付けの一刀持参致してござりまする。

正成　オオ、それ待ち兼ねしぞ。予が楠正成なるぞよ。

正行　また私は嫡男正行。よくぞ持参してくれたのう。

行光　直々のお目通りにありがたきお詞[ことば]、恐れ入ってござりまする。

正成　それなる一刀、ここへ持て、許す、近う。

行光　それ、ご前へ。

五郎　ハハァ。

と、一刀の箱を持ち敬々[うやうや]しく立寄り。

五郎　イザ、ご披見下さりましょう。

正成　オオ。

と、一刀を抜き。

正成　オオ、焼刃の匂い水や滴らん。天晴れ名剣、家の重宝。

正行　天晴れ五郎、出かしおったな。

五郎　ハハァ、恐れ入ってござりまする。

と、一刀を拭[はら]い、鞘に納める。

正成　かかる奇特を見る上は親子の者に頼み入れたき一義あり。このたび関白九條殿の姫君、夜な夜な物の怪に襲れ給い、お悩み烈[ハゲ]しき折柄、一子正行〝物の怪〟見届けが役を承る。その方それなる名剣にて正行に力を添え、退治なしてはくれまいかの。

行光　ハハァ、勿体なきその御諚[ごじょう]。かかる仰[おおせ]を蒙[たまわ]る上は、一命かけても、このお役目、勤めさすでござりましょう。

正成　オオ、よくぞ申した。良三、万事仕度[したく]を致せよ。

良三　ハハァ。

と、平伏す。

第二十七　庭前に怪しき女性（九條殿寝所）

ここに姫君、高枕釣り夜具にもたれ、枕頭に関白公、その他、侍女大勢、附添い、正面は一面の御簾、菊燈、灯しある。

関白　コリャ姫よ、今は悩みも、あらざるか。

姫　ハイ、今は少しの悩みさえ(と、いいかける。この時一時に灯消え)アレアレアレ、またも私を苦しめるは何物の祟[たたり]ぞや。エエ堪え難や。若[も]しやなァ。

と、姫〝物の怪〟に襲われ、苦しみ悶える。関白、気遣いの体[てい]にて。

関白　それ女共、庭前の警固せよ。

侍女　ハハァ。

と、官女一同きっとなる。

画面一転。

ここに一陣の魔風起り、暴風雨来り、樹木狂乱す。空中より怪鳥 ―形は雉に似たる大鳥にして、顔狐の如く、嘴[くちばし]長く、尾四五本長く垂れ、その先蛇の形をなす― 砂を巻いて

忽然、十二単衣を着した官女に変じ、御簾の中をきっと睨む。口は耳まで裂け形相物凄く、絵扇を翳し、階段に足をかけ、御簾の中へ入らんとする時、左右より侍女大勢薙刀を持って走り出ず。

侍女　ソレ曲者、推参なるぞ。

怪女　何を。

と、侍女と怪女の激しい打ち合い。侍女散々に悩まされる。この時、正行、身拵え、凛々［りり］しく走り出で。

正行　ヤア、怪しき女性［にょしょう］奴。楠正成が一子正行、イデヤ正体現わしくれん。

怪女　小癪な事を。

と、正行は刀、怪女は絵扇にて相方必死の斬り合い。遂に怪女、正行の襟をつかみ、元の怪鳥に姿を変じ、空中高く舞い上る。

五郎　オオ、御公達が御身の危難、おのれ怪物、観念せよ。

と、五郎、半弓を引き絞る。

第二十八　銘刀の威徳怪鳥を退治す（空中と山中）

ここに怪鳥再び女房となり黒雲を呼び、正行をつかみしまま、何処［いずこ］へか去らんとす。そこへ一矢怪鳥のこめかみに命中し、アッと手を放し、正行地上に落下す。怪鳥狂乱して飛び去る。

画面一変。

物凄き山中の体［てい］。正行、空中より落下、五郎走り来り。

五郎　オオ、若君様、ご息災にておわせしか。

正行　オオ、五郎か、そなたの助太刀、過分なるぞよ。

五郎　イデ、この上は銘刀を示して退治してくれん。

と、五郎、きっと空を見上げ一刀を抜き放ち差し付ける。これにて空中より怪女苦しみ舞い下り。

怪女　ウーム、さては刀の威徳にて、我が妖術も叶わぬか。思えば無念口惜しやな。

正行　一刀の下に仕留めくれん。

五郎　叶わぬところと観念せよ。

怪　何を。

と、これにて双方烈しき争闘。怪女、刀の威に恐れ、充分に働き得ぬこなし。五郎の一刀に眉間を斬られ、正行この隙に脇腹をえぐる。怪女、正体を現わし絶命す。関白、牛に跨［またが］り、侍女大勢を連れ出で来り。

正成　オオ、天晴れ五郎、よくぞ怪鳥仕留め得たぞ。

関白　その方の働きにて、姫の悩みも平癒せり。その功によりて今日より禁裏御番鍛冶に召し出し、名も五郎宝隆正宗と名乗り、長らく忠勤尽くすが好いぞ。

五郎　ハハア、ありがとう存じまする。

正成　これも偏［ひとえ］に孝道の鍛え上げたる刀の威徳。

関白　実［ゲ］に孝行は国家の礎じゃなあ。

と賞す。一同平伏す。時に鶏鳴［けいめい］暁を告ぐる。

≪映画了≫